

日蓮大聖人御書全集

うつぶさのにようぼうごへんじ

内房女房御返事

新版

2030

↓

2035

うつぶさのにようぼうごへんじ

内房女房御返事

こうあん

ねん

がつ

にち

さい

うつぶさのにようぼう

弘安

3年

('80) 8月14日

59歳

内房女房

うちぶさ
ごしようそく
い
はちがつここのか
ちち
候

内房よりの御消息に云わく「八月九日、父にてそういうい

ひと
ひやつかにち
あいあ

おんふせりよう
じっかん
進

し人の百箇日に相当たつてそういう。御布施料に十貫まい

そういうないし

らせ 候乃至あながしこ、あながしこ」。

ごがんもん

じょう

い

どくじゅ

たてまつ

みようほうれんげきよう
いちぶ

御願文の状に云わく「読誦し奉る妙法蓮華経一部、

どくじゅ

たてまつ

ほうべん

じゅりようほんさんじっかん

どくじゅ

たてまつ

じ が げ

読誦し奉る方便・寿量品三十巻、読誦し奉る自我偈

さんびやくかん

とな

たてまつ

みようほうれんげきよう

だいみようごまんべん

うんぬん

三百巻、唱え奉る妙法蓮華経の題名五万返」云々。

どうじょう

い

ふ

おも

同状に云わく「伏して惟んみれば、先考の幽靈生存の時、

せんこう

ゆうれいせいぞん

とき

弟子遙かに千里の山河を凌ぎ、親り妙法の題名を受け、
しかる後三十日を経ずして永く一生の終わりを告ぐ」等
云々。また云わく「ああ、閻浮の露庭に白骨仮に塵土と成る
とも、靈山の界上に亡魂定めて覺蘂を開かん」。また云わ
く「弘安三年、女弟子・大中臣氏敬白す」等云々。
夫れ以んみれば、一乘妙法蓮華經は、月氏国にては
一由旬の城に積み、日本国にてはただ八卷なり。しかるに、
現世・後生を祈る人、あるいは八卷、あるいは一卷、ある
いは方便・寿量、あるいは自我偈等を読誦し讚歎して所願

と

たも

せんれい

おお

を遂げ給う先例、これ多し。これはしばらくこれを置く。

とな

たてまつ

みょうほうれんげきよう

だいみょうごまんべん

うんぬん

「唱え奉る妙法蓮華経の題名五万返」と云々。この

いちだん

の

おも

せんれい

たず

ためしそく

一段を宣べんと思つて先例を尋ぬるに、その例少なし。あ

いっぺんにへんとな

りしよう

こうむ

ひと

あ

るいは一返二返唱えて利生を蒙る人、ほぼこれ有るか。い

まだ五万返の類いを聞かず。

いっさい

しょほう

わた

みょうじ

みょうじ

みな

ただし、一切の諸法に亘つて名字あり。その名字、皆そ

たいとく

あらわ

れい

せつこしょうぐん

もう

いし

の体徳を顯せしことなり。例せば、石虎將軍と申すは、石

とら

いとお

せつこしょうぐん

もう

まとたてのおとど

もう

の虎を射徹したりしかば、石虎將軍と申す。的立大臣と申

くるがね

まと

い

徹

すは、鉄の的を射とおしたりしかば、的立大臣と名づく。

まとたてのおとど

な

みなな とく あらわ
いま みょうほうれんげきよう もう そうろう
これ皆名に徳を顕せば、今、妙法蓮華経と申し候は、
いちぶはちかんにじゅうはっぽん くどく ごじ うち おさ そうろう
一部八巻二十八品の功德を五字の内に収め候。譬えば、
によいほうしゆ たま よろず たから おさ
如意宝珠の玉に万の宝を収めたるがごとし。一塵に三千
ほうもん
を尽くす法門これなり。

なむ もう じ うやま こころ
南無と申す字は、敬う心なり、随う心なり。故に、阿難
そんじや いつさいきよう
尊者は一切經の「如是」の二字の上に「南無」等云々。
なんがくだいしい
なんみようほうれんげきよう うんぬん
南岳大師云わく「南無妙法蓮華経」云々。天台大師云わく
けいしゅなんみようほうれんげきよう うんぬん
稽首南無妙法蓮華経

あなんそんじや
阿難尊者は、斛飯王の太子、教主釈尊の御弟子なり。
こくほんおう たいし
みでし

て 仏 を 仰 ぐ ゴ とく、 下座 に し て 文殊師利 菩薩、
なんみょうほうれんげきょう とな
南無妙法蓮華經と唱えたりしかば、 阿難尊者これを承け取
つて「かくのゴ」ときを我聞きき」と答う。九百九十九人の
だいあらかんとう ふで そ われき こた くひやくくじゅうくにん
大阿羅漢等は、 筆を染めて書き留め給いぬ。一部八卷
にじゅうはっぽん くどく ごじ おさ とど たま あなんそんじや
二十八品の功德はこの五字に收めて候えばこそ、 文殊師利
ぼさつ とな たも
菩薩かくは唱えさせ給うらめ、 阿難尊者またさぞかしとは
こた たも あなんそんじや
答え給うらめ、 また万二千の声聞・八万の大菩薩・二界八番
ぞうしゆ あ がつてん
の雑衆も有りしことなれば合点せらるらめ。
てんだいちしゃだいし もう しよういん みょうほうれんげきょう ごじ げんぎ
天台智者大師と申す聖人、 妙法蓮華經の五字を玄義

じっかんいつせんちょう か たま そろそろ ここころ けごんきょう
十巻一千丁に書き給いて候。その心は、華厳經は
はちじっかん ろくじっかん しじっかん あごんぎょうすうひやくかん だいじゅうほうどうすうじっかん
八十巻・六十巻・四十巻、阿含經数百巻、大集方等數十巻、
だいほんはんにやしじっかん ろっぴやくかん ねはんぎょうしじっかん さんじゅうろっかん ないし
大品般若四十巻・六百巻、涅槃經四十巻・三十六巻、乃至
がっしり りゅうぐう てんじょう じっぽうせかい だいちみじん いっさいきょう
月氏・龍宮・天上・十方世界の大地微塵の一切經は、
みようほうれんげきょう きょう いちじ しょじゅう
妙法蓮華經の經の一字の所従なり。妙樂大師、重ねて
じっかんつく しゃくせん な
十巻造るを釈籤と名づけたり。天台以後に渡りたる漢土の
いつさいきょう しんやく しょきょう みな ほけきょう けんぞく うんぬん にほん
一切經、新訳の諸經は皆、法華經の眷屬なり云々。日本の
でんぎょうだいし かさ しんやく きょうぎょう なか だいにちきょうとう しんごん
伝教大師、重ねて新訳の經々の中の大日經等の真言の
けんぞく さだ そうちら お
經を皆、法華經の眷屬と定められ候い畢わんぬ。ただし、
きょう みな ほけきょう けんぞく さだ そうちら お

弘法・慈覚・智証等は、この義に水火なり。この義、後に
ほぼ書きたり。譬えば、五畿七道、六十六箇国・一つの島、
その中の郡と莊と村と田と畠と人と牛馬と金銀等は、皆、
日本国の三字の内に備わつて一つも阙ることなし。

また、王と申すは、三の字を横に書いて、一の字を竪さま
に立てたり。横の三の字は天・地・人なり。竪の一の文字は
王なり。須弥山と申す山の大地をつきとおして傾かざるが
ごとし。天・地・人を貫いて少しも傾かざるを王とは名づ
けたり。王に二つあり。一には小王なり。人王・天王これ

に だいおう だいほんてんのう にほんこく だいおう
なり。二には大王なり。大梵天王これなり。日本國は大王の
ごとし、國々の受領等は小王なり。華嚴經・阿含經・
方等經・般若經・大日經・涅槃經等の已今當の一切經は
しょうおう たと にほんこくじゅう こくおう ずりようとう
小王なり。譬えば、日本國中の國王・受領等のごとし。
ほけきよう だいおう てんし
法華經は大王なり。天子のごとし。しかれば、華嚴宗・
しんごんしゅうとう しょしゅう ひとびと けごんしゅう
真言宗等の諸宗の人々は、國主の内の所従等なり。國々
たみ み てんし とく うば と くにぐに
の民の身として天子の德を奪い取るは、下剋上・背上
こうげ はじめうげらんとう げこくじょう はいじょう
向下・破上下亂等これなり。たといいかに世間を治めんと思
う志ありとも、國も乱れ人も亡びぬべし。譬えば、木の
ここころざし くに みだ ひと ほろ たと き
おも

ね うご

えだはしづ

たいかい

なみ

荒

根を動かさんに、枝葉静かなるべからず。大海の波あらか

ふね 穏

けごんしゅう

しんごんしゅう

ねんぶつしゅう

らんに、船おだやかなるべきや。華嚴宗・真言宗・念佛宗、

りつそう

ぜんそうとう

わ

みじかい

しようじき

ちえ

たつと

律僧・禪僧等は、我が身持戒・正直に智慧いみじく尊し

みすで

げこくじょう

いえ

う

といえども、その身既に下剋上の家に生まれて、法華経の

だいおんてき

あびだいじょう

のが

大怨敵となりぬ。阿鼻大城を脱るべきや。例せば、九十五種

げどう

うち

しようじき

うち

ひとおお

の外道の内には正直・有智の人多しといえども、二天三仙

じやほう

う

つい

あくどう

のが

の邪法を承けしかば、終には惡道を脱ることなし。

いま

よ

なむ

あみだぶつ

もう

ひとびと

しかるに、今の世の南無阿弥陀仏と申す人々、

なんみようほうれんげきよう

もう

ひと

わら

欺

南無妙法蓮華経と申す人を、あるいは笑い、あるいはあざむ

く。これは、世間の譬えに稗の稻をいとい家の田苗を憎む、
これなり。これ國將なき時の盜人なり、日の出でざる時の
鼈なり。夜打ち・強盗の科めなきがごとく、地中の自在
なるがごとし。南無妙法蓮華経と申す國將と日輪とにあわ
ば、大火の水に消え、猿猴が犬に値うなるべし。當時、南無
阿弥陀仏の人々、南無妙法蓮華経の御声の聞こえぬれば、
あるいは色を失い、あるいは眼を瞑らし、あるいは魂を
滅し、あるいは五体をふるう。伝教大師云わく「日出でぬ
れば星隠れ、巧みを見て拙きを知る」。竜樹菩薩云わく

「謬辭失い易く、邪義抜け難し」。徳慧菩薩云わく「面に死喪の色有り、言に哀怨の声を含む」。法歳云わく「昔は義虎、今は伏鹿」等云々。これらの意をもつて知んぬべし。妙法蓮華経の徳、あらあら申し開くべし。毒薬変じて薬となる。妙法蓮華経の五字は、惡変じて善となる。玉泉と申す泉は石を玉となす。この五字は凡夫を仏となす。されば、過去の慈父尊靈は、存生に南無妙法蓮華経と唱えしかば、即身成仏の人なり。石変じて玉と成るがごとし。孝養の至極と申し候なり。故に、法華経に云わく「この我わ

が二子は、すでに仏事を作しつ。また云わく「この二子とは、これ我が善知識なり」等云々。

乃往過去の世に一りの大王あり。名を輪陀と申す。この王は、白馬の鳴くを聞いて、色もいつくしく、力も強く、供御を進らせざれども食にあき給う。他国の大敵も胄を脱ぎ、掌を合わす。また、この白馬鳴くことは白鳥を見て鳴きけり。しかるに、大王の政や悪しかりけん、また過去の悪業や感じけん、白鳥皆失せて一羽もなかりしかば、白馬鳴くことなし。白馬鳴かざりければ、大王の色も変じ、力

な
あくび
かん
はくばな
はくちようみなう
いちわ
はくば
かこ
はくば
ちから
つよ
くご
おう
りんだ
もう
な
まい
じき
飽たも
たこく
かたき
かぶと
ぬ
はくばな
み
な
か
はくば
ちから
へん
ちから

も衰え、身もかじけ、謀も薄くなりし故に、國既に舌れ
ぬ。他國よりも兵者せめ來らんに、何とかせんと歎きしほ
どに、大王の勅宣に云わく「國には外道多し。皆、我帰依
し奉る。仏法もまたかくのことし。しかるに、外道と仏法
と中悪し。いかにしても白馬を鳴かせん方を信じて、一方を
我が國に失うべし」と云々。その時に一切の外道集まつて、
白鳥を現じて白馬を鳴かせんとせしかども、白鳥現ずる
ことなし。昔は、雲を出だし霧をふらし、風を吹かせ波を
たて、身の上に火を出だし水を現じ、人を馬となし馬を人と

いつきいじざい

はくちよう

げん

なし、一切自在なりしかども、いかんがしけん、白鳥を現
ずることなかりき。

その時に馬鳴菩薩と申す仏子あり。十方の諸仏に祈願せ
しかば、白鳥則ち出で来つて白馬則ち鳴けり。大王これ
を聞こしめし、色も少し出で來り、力も付き、はだえもあざ
やかなり。また白鳥また白鳥と、千の白鳥出現して、千
の白馬、一時に鶴の時をつくるように鳴きしかば、大王こ
の声を聞こしめし、色は日輪のごとし、膚は月のごとし、
力は那羅延のごとし、謀は梵王のごとし。その時に綸言

汗あせのいごとく出かえでて返もどらざれば、一切いつさいの外道等げどうとうその寺てらを仏寺ぶつじとなしぬ。

今いま、日本国にほんこくまたかくのごとし。この国くには始めは神代はじなり。

漸ようやく代よの末すえになるほどに、人の意ひと曲こころがり貪ま・瞋とん・癡じん強ちごうじょう盛ます

なれば、神かみの智ちあさ浅いく威りきも力りきも少すくなし。氏うじ子こどもをも守護うじこし

がたかりしかば、漸ようやく仏法ぶつぽうと申もうす大法だいほうを取り渡として、人の

意しうつたいも直ゆえぐに、神かみも威勢くに強危かりしほどに、仏法ぶつぽうにつき謬あやまり多おお

く出来でんぎようせし故だいに、國しかんどあやうかりしかば、伝教わた大師漢土かんがに渡あ

つて、日本と漢土と月氏との聖教しようぎょうを勘かんえ合がつわせて、おろ愚かんが

かなるをば捨て、賢きをば取り、偏頗もなく勘え給いて、
法華經の三部を鎮護國家の三部と定め置いて候いしを、
弘法大師・慈覺大師・智証大師と申せし聖人等、あるいは
は漢土に事を寄せ、あるいは月氏に事を寄せて、法華經を
あるいは第三・第一、あるいは戯論、あるいは無明の辺域等
と押し下し給いて、法華經を真言の三部と成さしめて候い
しほどに、代漸く下剋上し、この邪義既に一国に弘まる。
人多く惡道に落ちて神の威も漸く滅し、氏子をも守護しが
たき故に、八十一乃至八十五の五主は、あるいは西海に沈

しかい す

こんじょう

だいき

ごしよう

み、あるいは四海に捨てられ、今生には大鬼となり、後生
は無間地獄に落ち給いぬ。しかりといえども、このこと知れ
る人なけれど、改まることなし。今、日蓮、このことを
あらあら知る故に国の恩を報ぜんとするに、日蓮を怨み給
う。

これらはさて置きぬ。氏女の慈父は輪陀王のごとし、氏女
は馬鳴菩薩のごとし。白鳥は法華経のごとし、白馬は日蓮
がごとし。南無妙法蓮華経は白馬の鳴くがごとし。大王の聞
こしめして、色も盛んに力も強きは、過去の慈父が氏女の

なんみょうほうれんげきょう

おんこえ

き

ほとけ

な

たも

ごとし。

こうあんさんねんはちがつじゅうよつか

こうあんさんねんはちがつじゅうよつか
うつぶさのによっぽうごへんじ

にちれん かおう
日蓮 花押

内房女房御返事

弘安三年八月十四日